ISSN 1341-4364

近世哲学研究

第 11 号

カントにおける崇高の経験 ――― 牧野　英二　1

イデオロギー批判の技術哲学 ――― 橋本　武志　29
――マルクーゼ・ハーバーマス論争を手掛かりに――

「感性の弁護」（Apologie für die Sinnlichkeit）とは何か
――カントの「直観」概念の見過ごされたアスペクト――
――― 長田　蔵人　53

『純粋理性批判』の反実在論的解釈 ――― 千葉　清史　76
――その内実と意義――

＊　＊　＊

《書評》
武藤整司著『人間の輪郭－共生への理念』 ――― 吉川　康夫　95

2004　Epistola XVII

京大・西洋近世哲学史懇話会

編集後記

今年より、本誌は第二期に入った。大学を取り巻いているさまざまな慌しい状況のもと、ようやく刊行にこぎつけることができたことを編集実務の担当者に感謝し、不行き届きな点は、会員ならびに執筆者各位にお詫び申し上げる次第である。また、牧野先生は在外研究中の貴重なお時間を費やしてご執筆くださった。厚くお礼申し上げたい。そしてカント研究論文三篇を掲載しえたことで、昨年のカント没後二〇〇周年をささやかながら、本誌も記念できたことを喜びたい。

学生時代に読んだ松本正夫の『存在論の諸問題』（一九六七年）の「まえがき」にこんなことが書いてあった。哲学者の要件は「喜劇精神」と「諧謔」である。なぜならば、自己の立場の展開における絶対性が直ちに他の立場による完全な相対化に晒されねばならないことを受け入れるのが哲学であるからだ。この過酷な「絶対の相対化」こそは「喜劇精神」と「諧謔」そのものではないか、と。そのときそれほど興味をもったわけではないが、どこか心に響くところがあったらしく、その後三〇年経ってふと気づくと、自分のうちでこの言葉が発酵してきていることを感じる。改めて読み返すと、むしろこの言葉に先見の明を感じた。

と言っても、松本さんの言われるように他の哲学的立場からの相対化に身を晒すというかたちでこのことを自覚するのではなく、むしろ、一般社会との関係で私たちは喜劇役者としての自覚を持たざるを得なくなっている、ということなのである。周りを見渡しても、そういう了解をするのは決して私ひとりではないのではなかろうか、と思う。強いられた結果にとどまらない自発的な姿勢に基づく、一般社会向けの著作と発言の増加はそれを物語っているものとしか思われない。七〇年代にもてはやされた攻撃的な「トリックスター」や「道化」ではなく、喜劇役者のアイロニーをいつの間にか体得した人間として哲学に携わっている、ということで自分たちのスタンスを納得できる点が多いのである。

哲学者が社会に向かって発するメッセージはまず哄笑と失笑をもって迎えられるのが古来の普通であろう。今や、それを喜劇として、喜劇役者である自分たちの意識をもって演じることができるかどうかが、問われていることである。

私はこの状況をチャレンジングだと思う。悲劇としての哲学が単なる真面目くささというキッチュにしばしば陥りがちであるのに対し、本質的に喜劇であることを自覚している哲学は自己欺瞞がない分健全であり、実はより真面目なのではないかとさえ思うからである。真面目くさったものが笑われてしまっては致命的であるが、笑いを予想するものが笑われるのは勝利である。それが「芝居」であることの本質的なおかしさを受け入れられる強さを持つのはどちらだろうか。

『桜の園』が「喜劇」であることをチェーホフは繰り返し強調している。かつての「社会主義リアリズム」に基づく厳粛な上演が、実は俗な先入見と当て込みを確認するだけの儀式に終わりがちであったのに反して、喜劇であることを鮮明にした最近の演出こそが、私たちに新鮮な驚きとより大きな感銘を与えてくるのである。

（F）

『近世哲学研究』（既刊目次）

第一号（一九九四）

祝辞　酒井　修
ハイデッガーにおいて哲学を　田中　敦
——現存在の現象学的存在論考究——
カントと初期フィヒテとの接点　北岡　武司
義務論としてのカント倫理学　蔵田　伸雄
——功利主義との対比——
仮象と反省　山脇　雅夫
——ヘーゲルの矛盾概念の理解のために——

第二号（一九九五）

カント哲学における「経験」概念について　福谷　茂
——「世界」概念導入のための端緒として——
ヘーゲルのコルポラツィオーン論　早瀬　明
——市民社会の団体主義的変革に向けたヘーゲルの試み——
工学はどういうタイプの学問か　齊藤　了文
信仰の情熱とその逆説　田中　一馬
——キェルケゴール『おそれとおののき』におけるアブラハム解釈をめぐって——
ハイデッガーのヘーゲル解釈　橋本　武志
——意識の二義性と意識の転換——

第三号（一九九六）

『全知識学の基礎』の到達点　子野日俊夫
読書人世界から学者共和国制度へ　福田喜一郎
——理性を制度化しようとしたカントの試み——
デカルトにおける愛の区別について　武藤　整司
未済の人倫　石田あゆみ
——『精神の現象学』主—奴論の一解釈——
ガダマーのディルタイ批判　折橋　康雄
——『真理と方法』を中心に——

第四号（一九九七）

一本の綱（Seil）としての人間　吉川　康夫
——ニヒリズム状況下に於ける人間と社会の問題——
デカルトの懐疑について　安藤　正人
——『省察』の「反論と答弁」を資料として——
市民と国家の媒介　小川　清次
——「国民」形成の一側面——
『存在と時間』に於ける可能性概念の多義性について　橋本　武志
自然主義的存在論の隘路　次田　憲和
——フッサールの「領域的存在論」における超越論的構成の「自己関係的構造」——

第五号（一九九八）

「常に誤る」と「時々誤る」　武藤　整司
——デカルト的行論の一考察——

ディルタイに於ける客観的精神の概念について　折橋　康雄
ハイデガーの他者論　安部　浩

第六号（一九九九）

デカルトにおける《真理》と《存在》　倉田　隆
——明晰かつ判明に知得されるもの——
ヘーゲルの根拠論　山脇　雅夫
——知と存在との相即——
「第五省察」の隠された論理　次田　憲和
——フッサール『デカルト的省察』における「他者構成論」理解のための一視座——
シェリング哲学の出発点　浅沼　光樹
——人間的理性の起源と歴史の構成——

第七号（二〇〇〇）

——薗田　坦教授　退官記念号——

薗田　坦教授　略歴・業績一覧
《講演》
近世哲学における神の問題　薗田　坦
近世哲学とはなにか　福谷　茂
——新しい哲学史像のために——
人間の輪郭　武藤　整司
——その曖昧さを擁護するために——
知の自己吟味　山脇　雅夫
——『精神の現象学』緒論における知と即自の区別について——
ハイデッガーの良心論再考　橋本　武志
——可能性概念を手がかりに——
生と音楽　折橋　康雄
——ディルタイに於ける生と音楽の時間性の問題をめぐって——

第八号（二〇〇一）

自由の軌跡　北岡　武司
——批判哲学における自由の可能性の意味——
認識か解釈か　福谷　茂
——新しい哲学史像のために（二）——
G・ハーマン相対主義説の論理　田中　一馬
歴史的理性の生成　浅沼　光樹
——シェリング『悪の起源』における神話解釈の意義——

《書評》
北岡武司著『カントと形而上学——物自体と自由をめぐって』　橋本　武志
N・ケンプ・スミス著（山本冬樹訳）『カント『純粋理性批判』註解』　長田　蔵人

第九号（二〇〇二）

『存在と時間』と哲学の方法（形式的挙示再考）　田中　敦
フッサールにおける他者経験の構造と発生　榊原　哲也
ウィトゲンシュタインの「規則に従う」論の若干の考察　子野日俊夫
復古のもとでの立憲主義　竹島あゆみ
——ヘーゲル法哲学講義（ベルリン一八一九／二〇年）の二つの講義録——

《書評》
ヤーコプ・ベーメ著（薗田　坦訳）『アウローラ——明け初める東天の紅』　福谷　茂

第一〇号（二〇〇三）

十年の歩みを顧みて　薗田　坦

デカルトと自覚の問題　実川　敏夫
——コギトの弁証法性——

アレゴリーの復権をめぐって　高田　珠樹
——ガダマーとポール・ド・マン——

行為の規範としての礼節（decorum）の意義　福田喜一郎
——クリスチャン・トマージウスにおける法・道徳・礼節の区別——

格率とその「枠組み」　西川小百合
——カントの道徳判断論の新しい理解を目指して——

《書評》
福居　純著『デカルト研究』　浅沼　光樹

編集委員会　委員
小林　道夫
福谷　茂
福田喜一郎
山脇　雅夫
長田　蔵人
佐藤　慶太

執 筆 者 紹 介

牧野　英二　　法政大学教授

橋本　武志　　高野山大学非常勤講師

長田　蔵人　　京都大学大学院文学研究科ＯＤ

千葉　清史　　京都大学大学院文学研究科博士課程

吉川　康夫　　帝塚山大学教授

（執筆順）

近世哲学研究　第11号

2005年3月31日　発行

編集・発行　京大・西洋近世哲学史懇話会
編集代表　福谷　茂
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
京都大学文学部
西洋近世哲学史研究室内
http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/modephil/
ＴＥＬ(075)753-2444

印 刷 所　協和印刷株式会社
〒615-0052 京都市右京区西院清水町13
ＴＥＬ(075)312-4010(代)

定価　1200円(本体 1143円)

ISSN 1341-4364

STUDIES in MODERN PHILOSOPHY

No. 11

《Articles》

Eiji MAKINO : Die Erfahrung des Ergabenen bei Kant 1

Takeshi HASHIMOTO : Philosophyhy der Technik als Ideologirkritik 29
—— Anhand von Marcuse–Habermas Debatte ——

Kurando OSADA : What Is the 'Apology for Sensibility' ? 53
—— From a Hitherto Neglected Aspect of Kantian 'Intuition'——

Kiyoshi CHIBA : Anti-realistische Interpretation der *Kritik der reinen Vernunft* 76
—— Deren Gehalt und Bedeutsamkeit ——

* * *

《Review》

Yasuo YOSHINAKA : Seiji MUTO, Where are we now? *: Lifelong Learning and Practical Philosophy* [in Japanese] 95

2004 Epistola XVII

Published by
The Society for The History of
Modern Philosophy
at Kyoto University